

前穂北尾根 報告

日時 2012.8.17～8/19

場所 飛騨山脈 前穂高岳 北尾根

目的 バリエーション

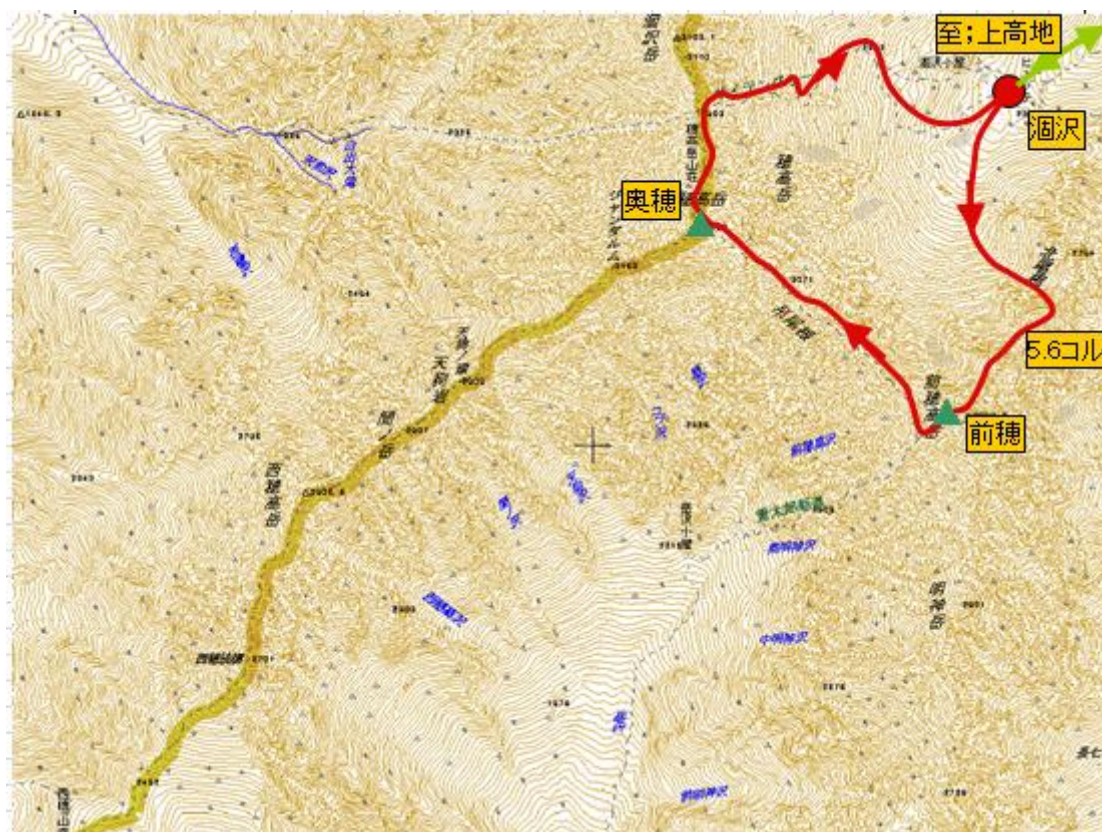
山名 前穂高岳

ルート 北尾根

メンバー 松村（リーダー）

亀井（食料担当） 報告書著者

ルール図



概要 一日目 上高地より湊沢へ向かい、湊沢にベーステント設営。にて一泊。

二日目 湊沢より 5.6 のコルへ。北尾根を登り、奥穂高経由で湊沢へ。

涸沢ベース撤収。そのまま、徳沢へ。徳沢にて、テント泊。

三日目 徳沢より上高地。そのまま帰宅。

～山行報告～

前穂高岳 北尾根。

著者は、北アルプスには、ほとんど行ったことがないです。前穂高岳がどんな山なのかは、昨年の北鎌からみた景色でしか、知りませんでした。

穂高といったら有名な山。登ってみたいけど、一般路は登れるだろうなーと思っていた著者でした。

北尾根という、魅力的な印象を受けた尾根を知ったのは、去年の北鎌。

ギザギザした北尾根に、グッときたわけです。

リーダーは、松村さん。著者は、食料担当。

上高地や涸沢などに、あまり知識のない著者です。リーダーはとても詳しく、ルートや行動計画は、リーダーに全て立ててもらいました。

食料担当の著者は、自分が食料を担当したということを忘れていました。

担当だったのを、出発三日前に気付き、二日前に買い出し。イトーヨーカドーで悩みながら、食料を購入しました。CM でやっていた、おいしそうなラーメンと、おいしそうなチャーシューが目に入り、これは食べたい！と、悩みながらも、軽量化に努めようと思っていました。実際、それほど軽量ではなかったです。アルファ米もあったのですが、いつもそれでは味気ないと思い、チャーハンの素というのも購入しました。結果は、まあまあ。でも今後もっとよりよく出来る可能性を秘めたものになりそうです。



～一日目～

今回、合宿といっても二人なので、著者はリーダーを迎えに行くことから出発となりました。最近買ったザックを今回初めて使ったのですが、二人でのテント泊ということもあり、ザックの容量が小さく、ザックがパンパンになってしまい、その分を負担をしてしまったリーダーには、申し訳ないことをしてしまいました。

上高地に向かう道中は、計画の事やら山の事やら、色々と話して、あっという間に沢渡の駐車場につきました。

駐車場で、乗合タクシーが 800 円で上高地だよーと言われ、これはお得wとすぐに乗り込みます。朝一番、まだバスですら運行していない時間ですが、上高地に赴く人は多いです。タクシーに揺られ、眠気に誘われそうでしたが、著者は、これからの山行にワクワクして、寝れませんでした。

早朝の上高地は、人もまばらで、さわやかな朝です。登山案内所に掲示されていた、事故の張り紙に少しビビり、わかっているつもりでも、やはり山というのは危険がともなうものだと改めて思いました。

上高地より涸沢までは、それといった危険はないです。途中、多くの登山者とすれ違いましたが、山ガールの気配は薄かったように思われます。

すれ違う登山者の中には、私たちの姿を見て、「どちらに行くの？」と声をかけてくる方もいました。やはり、ヘルメットとロープを携えている登山者は、少し雰囲気が違うとは思います。

涸沢までの道中、印象に残ったことがあります。子どもも多いということです。涸沢は北アルプスでも人気らしいので、家族で来るのでしょう。沢山の荷物を背負うお父さんは立派です。そういう自分たちも、二人での山行に関わらず、4～5 人テントを装備していました。かなりのオーバースペックです。装備は、お互いで分けながら持っていましたが、重い荷物と蒸し暑さに、体力の消耗は激しかったです。やはり、軽さは重要です。

フーフーいいながら、涸沢へ到着。涸沢は、なんとおしゃれでしょう！著者は、初めての涸沢です。人も多く、山小屋も綺麗です。景色も綺麗ですが、北尾根登攀に不安が無いわけではなく、北尾根を何度も何度も見てしまいます。

三日間のベースとなるテントを設営し、明日の北尾根まで、たっぶりの休憩としました。

まだ、太陽の位置も高く時間も早いため、涸沢ヒュッテの売店で、おでん+ビールセットを購入しました。二人で乾杯！！不思議といつもより美味です。北尾根をバックに、オープンテラスの座敷で飲んでいると、雨が降ってきました。雨は強さを増し、テントに避難となってしまいました。天気予報でも、それほど良い予報ではなかったため、雨はある程度は予想していましたが、雨の中、北尾根に行ってもなあ・・・と二人の意見は合致していました。今後どうするかを話し合っ、「明日朝起きたときに天気が良いようだったら、北尾根を攻めましょう。しかし、この天気です。雨だったらそのまま帰宅ですね」

そう話し合い、ほぼ雨だろうと思っていた著者は、持って帰っても仕方のないお酒を、ぐ

びぐびと飲み、寝袋へと滑りこみました。消灯後、雨は降り続き、あとは帰るだけだと、北尾根への気持ちは萎えていました。一応、朝三時起床・朝四時出発に合わせて、起床時間に天気を確認はするとしました。



～二日目～

朝三時起床！

ウホウ　すばらしい満点の星空です。予想とは真逆の天気です。

「これは、北尾根ですね」

一気に気持ちをアゲアゲに高め、準備を始めました。朝飯をかつ喰らい、暗闇の中の北尾根を目指し、雪渓へのアプローチ。帰宅モードから、登攀モードへのスイッチの入れ替えが完了！帰宅だろうと思って落ちていたおかげか、変に緊張感がなく、朝から快適な気分でした。

必要な装備以外はテントにデポしてきたため、北尾根アタックは軽量装備で向かいます。ヘッドライトでの雪渓歩きです。著者は軽アイゼンを持っていませんでした。リーダーは軽アイゼンを装備。やはり、軽とはいえアイゼンがあったほうが良かったと、今でも思っています。表面がカリカリに凍っていると、さすがに滑ります。

後方、ヘッドライトが光っているのが見えました。夜も明けきらぬ暗い闇に、北尾根を目指す武士が他にもいました。

最初の目的地は5・6の科尔です。雪渓歩きを進めるより、雪渓を巻いて踏み跡を歩いて向かうのが一般的なようです。雪渓上部は斜度も増していくので、アイゼンが無いと行動速度が落ちるような印象でした。

踏み跡をしばらく歩き、5・6の科尔は目の前です。後方には、北穂高岳が朝明かりに照らされ、その山容を露わにしていました。

5・6の科尔に着き朝の光に照らされ、涸沢側には吊尾根・奥穂高・北穂高。奥又側には、白池・梓川・富士山も遠くに見えました。天気は、申し分ない素晴らしいものです。

5・6の科尔にてハーネスやガチャの準備をしっかりと整えました。ここでリーダーより、一応ということでカムを渡されました。結局のところ著者は使わなかったのですが、リーダーは使う場面に遭遇していきます。登攀において、余計な道具は重量を増すだけとは思いますが、著者もカムやナッツはそのうちそろえようと思いました。

お互いの無事と、ガチャを確認しあい、いよいよ五峰へととりつきました。五峰は特に問題無いと思います。基本、稜線を進めばよく、変にトラバースなどを考えず行けばよいと思います。とはいえバリエーションは油断は禁物ですので、浮石や落石には十分注意しながら、リーダーと声を代えあいながら登って行きました。



五峰はあっという間に登り切ってしまい、すぐ四峰の取り付きにたどりつきました。先行情報では、四峰はガレ場も多く落石も多い。涸沢側にも奥又側にも踏み跡らしきものが多数、とのことでした。われわれ二人は、事前情報と DVD にてある程度知識に入れていたので、慎重にいけばそれほど間違いはないだろうと思っていました。しかしこれがま

さかの、今回の北尾根での最大の核心となった四峰でした。

四峰登攀開始、ロープは特にださず。登り始めは涸沢側に巻きながら登り、あまり涸沢側に行かないようにしながら、大岩まで登る。大岩より奥又側へ巻いてゆき、また涸沢側へ巻いてゆく。ここで、今回の核心がおとずれました。

大岩にたどり着いた二人は、予定通り奥又側に巻いていきました。しかし、巻き道がずっと続いている・・・？こんなに巻くだろうか・・・？この先は、おかしそうだと思った著者は、怪しい巻き道の手前の涸沢側へと登れそうなところではないのか？とリーダーと話し、リーダーがそこを登り始めました。

圧倒的に著者より登攀力のあるリーダーが苦戦。クライミングシューズを履き、ロープを使い、カムを使い、ハングを登攀。しばらくし、著者がセカンドで登攀開始。まさかの超超苦戦。クライミングシューズを忘れた著者は、ごっつい登山靴でアタックしましたが、今までの登攀で最大級の苦戦でした。ここは完全なクライミングになってしまいました。お互い登り終えた後に、確実に自分たちが行こうと思っていたルートでは無いですねとなりました。DVDで得ていた情報だと、ロープも出さずにすいすい歩いていたので、こんなにがつつりクライミングの要素があるわけないのです。しかし、それも登ってしまえば後の祭り。むしろガラガラしたところをロープなしで歩くより、しっかり登ってしまったほうが安全なのかもしれません。まさに今回の北尾根の核心！と言える、思い出深いバリエーションです。このときに、後方にいた二人組に巻き道よりぬかされました。あえてのバリエーションのクライミングですか？的な事を言われていましたが、いえいえ、間違えただけです。

四峰も上部に近づいてきました。その後は特に問題なく進み、いよいよ高度感も上がってきて、遠くには槍も見えてきました。

四峰頂上は広めで、三峰の取り付けから三峰の上部までよくみえました。抜かされた二人組は、3・4のコルで休憩してます。私たちも、広めの3・4のコルで休憩していました。私たちも遠巻きに三峰のルートファインディングをしていて、3・4のコルにて抜かされた二人組と話していました。その二人も北尾根は初見で、ルートなどを話していました。御先にどうぞ。と二人組に言われましたが、四峰で手間取り抜かされた身。じゃあ行きますねというのは少しずうずうしいので、先に行ってもらいました。

1ピッチ目。リーダーは難なく登り、私も続いて登りました。ルートは奥又側を少し巻いていくような感じで行きました。登山靴でもいけるような感じではありましたが、若干細かいところがあったので、クライミングシューズをはいていたほうが、安心して登れるかと思われます。ハーケンもところどころ打ってありました。気持ちいい1ピッチ目です。

2ピッチ目。大きな二本のチムニーの下にて1ピッチ目は切り、そこから右側のチムニーを登ることになりました。左のチムニーは、リーダーなら行けると思いますが、登攀力がないうえに登山靴の私には、無理そうだなと思われました。

右チムニー上部より、少し奥又側に巻くようだったのですが、そのまま直登して行きまし

た。フォロアーの私は、リーダーのビレイにて登って行きました。リーダーの中間支点を回収しながら登って行くわけですが、ここで、地面にポテッと落ちているスリングとヌンチャクがありました。直登でいったルートにはあまり登られた跡が無く、ハーケンや残地がないようで、マイナールートでした。岩にスリングにて支点をとってあったみたいなのですが、上部方向に登っていった段階で抜けたようです。ロープの引いていく方向などもあるとは思いますが、支点というのは難しいです。

3ピッチ目。チムニーより少し上部にて2ピッチ目を切りました。3ピッチ目は一応ロープを出してピッチを切る形で登りましたが、ロープが無くても登れるかな？といったくらいです。一気に三峰上部にあがり、目の前には二峰。その先に前穂の頂上が見えます。

三峰頂上は少し危なげです。大きな岩が折り重なるように立っているのも、油断は禁物です。ロープも無く気持ちも少し途切れそうなポイントが、本当に危ない核心なのかもしれません。三峰頂上からは、前穂の頂上にいる登山者が見えます。やはり、北尾根からくる人が気になるようで、こちらを見えています。なので、大きく手を振ってみると、向こうも大きく手を振ってくれました。

三峰より二峰はすぐ目の前です。

二峰頂上も少し危なげです。懸垂のポイントはとても足場が悪く、セルフをとっていないとものすごく不安になるような場所でした。(私は、バリエーションをやると、セルフが大好きになります)

二峰頂上から懸垂です。残置のスリングなどはワサワサあり、なんぼでも懸垂ができそうでした。しかし、岩がごつごつしたところにある懸垂ポイントなので、ロープが引っかかるかもしれないという不安感がありました。(過去の嫌な思い出が・・・)二人とも降りてロープを引き、問題無くロープが流れてくれた時は、何とも言えない幸福感がありました。懸垂が終わると、もう頂上です。ちょっと登ったら前穂の頂上に着きました。北尾根の三峰・二峰・頂上というのは、ほぼ一つの峰と言ってもいいくらいあつというまででした。

頂上は広く、登山者も数人いました。先に行った二人組ともお会いして、お互いの北尾根の写真を撮り合いました。

北鎌の時ほど人はいなかったのも、拍手喝さいといった頂上ではなかったのですが、数人の登山者にはお言葉をいただきました。

頂上は時折、北尾根の景色が見え、まあまあの天気でした。上高地側は全く見えず、吊尾根は良く見えました。

なによりも、北尾根から前穂の頂上に立ってみてみると、一緒に登ってこれた素晴らしい仲間がいることが嬉しいです。

頂上にはそれほど長い時間はいなく、さっさと下山にとりかかりました。

時間はまだまだ午前中ですが、天気が悪くなるという予報だったので、早めの撤収が吉であると、山屋感が身についていました。



吊尾根歩きは何ともかったるく、特に面白いことは無かったように思います。

途中、奥穂高岳山頂で写真を一枚。奥穂高に初めて来た著者ですが、これといって感動はなかったです。

しばらく歩いていると、奥穂高山荘が近づいてきました。すると、ぱらぱらと雨が……。山荘直前で、どしゃぶりになってしまいましたが、ぎりぎりセーフで山荘に滑り込み、雷と雨が去るのを待つこととなりました。山荘内は、雨で避難してきた登山者でごったがえし、少し疲れが出ていた著者は、椅子に座ると寝てしまいました。一時間半くらいか、リーダーが雲が切れてきたのでそろそろ行けるでしょう、との判断で、止みかけてきた雨の中を出発しました。

ザイテングラードをすたすたと駆け下り、一応、雷を気にして、離れて行動をしていました。

♪ ♪ ♪～。なにやら涸沢が騒がしいです。

遠目に、涸沢ヒュッテに人が大勢集まっており、ピンク色した服のかたまりが見えます。山の中に、管楽器の音色が響き渡り、合奏団が演奏をしています。

今日はこんなイベントがやる日だったのか～！音色が疲れを癒し、足よりも軽やかになるようでした。私も楽器が出来るようだったら、山に持って行くのもいいな～と思いました。涸沢山荘にたちより、アイスクリームを食べました。北尾根バックのアイスは格別です。





このころには雲も切れ、空が良く見え、常念岳のほうまですっきりと展望しました。
涸沢ヒュッテのテント場に着き、さっそく上高地に向け準備を始めました。
というのも、到着時間が早く、今日上高地に降り帰宅へといけてしまうのではないかと

話しており、実際、二人とも行動も早く、歩きも強いので、上高地にいてバスかタクシーがあればそれに乗ってしまいたいとしていました。

合奏団の音楽や、涸沢の景色に少しもったいなさも感じておりましたが、合奏の音楽を背に、下山道を歩き始めました。

横尾までの途中、体調が悪い方がいるという家族と出会いました。その家族は横尾に一泊の予定とのことでしたが、横尾への到着が遅くなるというむねを、横尾の受付に伝言していただきたい、とリーダーが受けました。その場所では、まだしばらくは日が明るい時間であったので、日が落ちる前には着くだろうとは思いました。

私たちは横尾に着き伝言を伝え、ひと休憩。しかし、上高地のバスが何時に終わってしまうかわからなかった私たちは、時間に余裕を持たせることも気がかりで、すぐに出発です。疲れもでてきた私たちは、もくもくと歩き続けました。

とりあえずは徳沢までだ。雨と湿気と暑さで、体力は消耗していましたが、歩みは止めません。

徳沢へ道中、すこしずつ暗くなってきたかな？という空模様で、前から来る人も、後ろに歩いている人もまったくいなくなっていました。すると、前方に中年の方、四人がいました。一人の様子が明らかにおかしいです。話をきいてみると、腰をおかしくしてしまったようで、二人に支えてもらいながら歩くのがやっとの状態でした。横尾より出発したが、これほど状態が悪いものだと思わず、徳沢に行こうと出発したとのこと。私たち二人に、徳沢にいくのでしたらタクシーを呼んでもらいませんか？と頼まれましたが、多分無理でしょうと断りました。厳しいようですが、ゆっくりでもその人は歩いています。腰が痛いからタクシーを呼んでくださいでは、山をなめすぎてるのではないのでしょうか？確かにここは、山荘への物資の為に車が往来しています。完全に山の中だったらどうするんだ？もっと症状が悪くなったらどうするのか？と考えはしないのでしょうか。徳沢までは距離はありますがお気をつけてと声をかけ、われわれは先に行きました。

徳沢に着き、徳沢園の受付で上高地のバスの時間を聞きました。バスやタクシーがどうのこうのと言うよりは、釜トンネルが20時で閉まってしまうとのことで、徳沢にいる我々はあと一時間ちょっとで上高地までいかなければ、帰れないという情報を得ました。

すぐにテントの受付をし、徳沢でビールで乾杯となりました。

疲れもあり、ご飯をたべてお酒を飲んだら、すぐに寝てしまいました。

～三日目～

徳沢テントにて起床。朝一の上高地のバスを目指し、出発しました。

天気はすごくよく、明神岳は立派に美しいです。

上高地までの道中、山方面に向かう登山者・観光者がとても多く、やっとな高地感を味わえました。

駐車場までバスに乗り、やっとな帰ってきたという実感と安心感と満足感でいっぱいです。

帰りは、松本市内にて銭湯にはいり、すきやにて牛丼をいただき、帰りました。

道中、マニアックな話もでながら高速をひた走りました。マニアな話にも絡んでいただけるリーダーです。



～感想～

- ① ルートファインディングの難しさを感じました。北鎌の時とは違い、自分で判断しなければなりません。結果登れてしまったから OK というのは、まったく OK ではなく、ほんの少し状況・環境・体調などが変われば、一気に山は牙をむいてきたと思います。
- ② リーダーの判断はすばらしかったです。特に、雨で停滞の時。自分的には、ちょっとくらの雨なら行ってもいいのでは？などと思っていました。しかし、現実はその時、槍のほうで落雷により死亡事故。考えが甘すぎました。
- ③ 今度行く時は、クライミングシューズを持って、リードできればいいなと思います。しかし、次回行く時は、アイゼンかもしれません。
- ④ おしまい